

若手研究者アンケートの第1次集計結果の分析と提言

－ 若手研究者の視点から －

(Web 用)

安成 哲平*

ここには、「天気」誌上(安成 2009)に載せ切れなかった、若手研究者アンケートの各設問の集計結果に対する若手側からの分析データを載せておく。必要に応じて、安成(2009)と共に若手研究者アンケートの集計結果のデータベースとして利用していただければ幸いである。また、同時に「天気」に掲載された大学教員側からの分析結果(中村ほか, 2009)^{†1}と比較していただき、気象系若手研究者の今後を考える上での参考資料にしていただきたい。

1. 「天気」誌上に載せられなかった各質問への回答分析結果

本1次集計においては、Q1～7 及び Q73～Q84 についての回答について集計している。以下に示したのは、中堅以降の研究者の分析と対比するために、中村ら(2009)とは独立に、アンケートの各質問項目の集計結果に関して、あくまで一若手研究者の観点から行なった分析である。当然、中村ほか(2009)と一致した分析結果もあれば、そうでない部分もある。集計の図については、中村ほか(2009)の番号と対応させて(中村氏らの第 1 図はN図1などのように)あるので、適宜参照してほしい。尚、中村ほか(2009)においては、誌面の制約上、Q2-5, Q76 になどについては、図を載せていない。近いうちに気象学会のHP等にすべての図を掲載する予定であり、そちらも参照してほしい。

Q1: 年齢構成について(N 図 1)

30 代までの若手研究者の回答が全体に対して多かったことは、現状を一番シビアに感じている世代からの意見が反映されていると考えられる。

Q2: 男女比について

どの世代も男女ともに回答が得られており、特に若手が男女ともに積極的に答えていただいていることから、若手の男女が考えるポストク問題についての意見が良く反映されるアンケートと考えられる。

Q4 と Q5: 学部卒業大学と修了大学院について

学部では、地方国立大や私立大もある程度の出身者数があるが、大学院修了時には大多数が、主

* 米国航空宇宙局ゴダード宇宙飛行センター(NASA/GSFC)客員研究員: GEST/UMBC 所属。

^{†1} 中村ら(2009)の web 版は <http://www.soc.nii.ac.jp/msj/PDenq2008/kekka/rjikai.pdf> を参照のこと。

要 7 大学^{†2} 修了になっているため、このアンケートの結果は、主に主要 7 大学の環境下で大学院教育を受けてきた人達の意見が最も反映されているものと考えられる。注意点としては、大学院生の意見として、私立大学や地方国立大の状況が、必ずしも反映されていない可能性があることである。

Q6: 現在の身分について(N 図 2)

25%程度がこれから学位を取るであろう人達(必ずしも全員ではないが)の意見が反映されている。任期付き研究員は回答 f~h の合計 19%程度とであるが、現在、一番シビアな状況を感じているのが 19%の参加ということは若干少ないかもしれない。また、非研究職(公務員含む)も回答 m 以降で上がっているおり、こちらも合計で 19%の参加であった。現在非研究職の方々は、ポスドク雇用問題の現状がシビアなのを知って非研究職を選んだのか?それとも、元々非研究職に興味があって就職したのか? そのどちらが多いかを次の機会に把握した方が良いと感じる。もし前者であれば、気象分野で研究を続けて行きたいと考えたにも拘らず、研究の世界から遠のかざるを得ない状況がかなりあることを示唆する結果である。

Q7: 気象学会会員かどうかについて

気象学会会員の意見が主に反映されているアンケート結果と考えられる。

Q73: 気象分野の博士課程の院生数について(N 図 7)

全体の約 3 分の 1 が現在の気象分野の院生数を過剰だと思っており、その意見は特にポスドク、研究所上級職、大学助教から多い。教授・准教授からはそれほど多くなかった。ポスドクの現状について、(ポストの少なさを)身を持って知っている若手を中心の研究者層が、大学院生の数の多さと研究ポストの少なさ両方を身近に感じることで、「こんなに院生が多ければ全員が常勤職に就くのはとても難しい」と考えていることの現れではないだろうか。その一方で、3 分の 1 弱は適正数と思っており、「過剰」という意見に比べて、世代間のばらつきも少ない。

Q74: 大学院重点化政策の評価について(N 図 8)

約半分程度の回答者(d, e の合計)が大学院重点化には悪影響があり、その悪影響の方が勝るという回答をしている。教授・准教授や修士の院生など、ポスドク雇用問題からは少し離れた年齢層からは「悪影響の方がはるかに勝る」という考え方は全体的には少ない。その一方でポスドクはこの回答が一番多い。これは、やはり当事者になった人達が実際目の当たりにしてわかる問題と考えられる。一番おもしろいのは、「いい影響があった」と回答したポスドクが 1 名しかいなかったことだ。普段、個人的にポスドクの人と話をしても、「なんとかお互い生き延びましょう」など、明るい未来の話を全く聞かないが、このアンケートもそういったところに通じるように感じる。良い影響の方が勝るとい意見を挙げたのは全体でわずか 30 名しかおらず、半々であるという意見を除けば悪影響の方が勝るとい声年齢層を越えて大半を占めている。やはり、大学院重点化が悪影響をもたらしたと認識すべきではないかと考えられる。

^{†2} 大規模な気象学教室を擁する大学。即ち、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、九州大学。

しかし、だからと言って、もう実現してしまった大学院重点化を批判しても何も始まらない。ここから、どう建設的に解決策を模索し、できるだけ迅速に実行して問題を1つずつ解決していくかである。

Q75:ポスドク研究員の急増について(N 図 4)

317 名中 291 名がポスドクの急増について深刻に考える必要があると考えている。これは、気象分野の大多数がポスドク研究員数の急増を深刻と捉えているものと認識すべきである。しかも、半数以上が「非常に深刻で、早急に対策を！」と言っている。このアンケート結果を見る限り、迅速に行動を起こさなければいけない時期はまさに今ではないだろうか。この声こそがすべてではないだろうか。

Q76:Q75 で a「さほど深刻に捉える必要はない」と答えた人の理由について

これらの回答数は全体でも 15 と少数であるがポスドク問題の真ん中にいる当事者からの主たる意見が反映されているとは思えない。何故なら、ポスドクの意見はわずか 1 名であった。

回答 b は「好きなことで飯を食うのは大変」という昔から定説に基づいていると推測できる。「ある程度」というのがみそで、本当に「飯を食えない」という不安がある場合の人が果たしてこのように思えるかどうか重要ではないかと若手研究者の立場からは考える。回答 c の「研究に専念できる期間があるというのは損にならない」というのは、ある意味正しい。実際、無駄になることは何もないと私自身も思っている。しかし、これはあくまで、その後に研究職が継続できる状況が期待できる(もしくは実際継続された)場合に思えることではないだろうか。回答 d は、昔はオーバードクターで予備校講師をしたりするのが普通だったという時代の人の考え方として入ってきていると考えられる。その当時に比べると、今は、博士号取得後そのままとあえず 2~3 年はポスドクとして研究できるという状況を評価するということだろうと推測する。回答 e に対しては、「いずれポスドク数(これからポスドクになっていく人)は減る」ということだが、今現在のポスドクはどこに収まることを想定しているのかどうか。若手側からの意見として、私はこれからの進学者が減ることよりも、まず第 1 には今頑張っているポスドク研究者が生活できなくなつて研究業界から去ることで減ってしまう事態が起こる方がとても心配である。

Q77:Q75 で b「かなり深刻に捉える必要がある」、c「非常に深刻。早急に対策を！」と答えた人の理由について(N 図 5)

ポスドク研究員数の急増を深刻に考えている人の一番の理由が回答 e としての家庭や子育ての問題をあげている。この回答は、今の派遣社員切りの問題と共通するものがあると考えられる。それは、日々の生活がきちんとできた上で、初めて他のことに専念できるということがあるが、その生活すら危うい状況では研究に専念などとてもできないということなのである。それを反映しているのが次に回答が多かった b, c, f であり、「研究の力をつけられない」、「士気自体の低下」、「その現状を見て、将来研究者になりたいと思う院生の減少」につながっていると考えられる。日々の生活が成り立つからこそ研究生活が成り立つという点が一番大事なポイントである。この部分こそがポスドク(任期付き研究員)が抱える問題の本質ではないだろうか? つまり、逆を言えば、一生ポスドクであっても、定期的に就職活動等に時間を取られないで研究を継続できるシステムが社会的にあれば、立場上ずっとポスドクであっても上記問題は改善されると考えられる。

その他の意見として挙げられた「就職のためには小さな研究を複数行った方がいい」という回答は、研

究の質という意味で大変重要な回答である。つまり、データ取得に時間がかかってしまう研究や、なかなか受け入れられない仮説の検証等に力を入れて、真に気象学の進展に貢献可能な重要な発見(ブレイクスルー)につながるような研究に取り組む者が減ってしまうことが懸念される。極論すれば、近い将来、予め予想され得る範囲内で短時間で結果が期待できる研究しか誰もやらなくなってしまうのではないだろうか?これは Science としての気象学の発展を脅かしかねない重大な問題である。

教授・准教授からは、大学院生が気象分野に興味を持たなくなる可能性を心配する声が多いが、その他の職種・院生からの回答では傾向はほとんど同じく、やはり生活への不安、目先の成果主義の問題、若手の士気の低下を懸念している。

Q78:ポスドク問題を深刻化させた要因について(N 図 6)

「見通しの甘さ」と「ポストの少なさ」が際立っている。「見通しが甘かった」とは言うものの、既に起こったことなので実際問題に向き合うしかないことと考えると、現状での一番の問題点はポスドクの次のポストがないことに尽きると言えよう。よって、この問題の抜本的解決にはポストを増やす以外にはないと考えられる。博士課程に進む学生を減らす等はその後の問題であると考え。まずは現在行き先がなくて困っているポスドクが落ち着かないことには現状改善には繋がらないという意見を反映したものと考えられる。常勤ポストがすぐに増やせないのであれば、継続・再任可等の方法で当面は凌いでゆくしか手はないのだろうか。

Q81:「成果主義」に基づく評価の拡大傾向について(N 図 9)

大多数の回答 d と回答 a, g を考慮すると、税金を使う以上「成果」を問われるのはもちろん当然である。これは研究者から見ても正しい意見である。ただし、その「成果」というのがみそで、これがイコール「目先の成果(短期的に出せる論文)」として評価されがちなことこそが問題と考える。若手はそのプレッシャーと次のポストのことで不安を感じている。また、「成果」というものがある特定の側面のみから測られる傾向があり、これが偏った研究評価に繋がることが懸念される。

おそらく、現状では「成果＝論文数」という基本認識になっていると思われるが、分野によって業績(この場合は論文)の上がる速度が異なる傾向がある。これを考慮し、論文数という短期的な成果だけを業績の指標にするのではなく、例えば、論文が出にくい分野は、精力的に学会発表をしたり、行っている研究内容を一般の方々にわかりやすく説明するような機会(アウトリーチ含む)を多く作って研究の社会的意義を多くの人に伝えたり、装置の立ち上げやモデルの使用マニュアル・バグ改善状況を詳細にレポートにまとめ大学・研究機関の研究資産作りに貢献したり、学生の指導に十分時間を費やして教育活動をしたり等の別の形の成果もきちんと成果として評価する(できる)ようにすることが必要と考えている(その他の回答にもあり)。本来、業績はこれらすべてを含むべきものだが、現実には論文数だけが重要視されているような状況がある。もちろん、税金を使っているという意味で論文も精力的に書いていくのは当然必要なことである。ただし、これは時間がかかってもやった研究をまとめて公表するという意味であり、短期間に出すという意味ではない。客観的に誰にでも判断しやすい評価の仕方の1つが短期的な論文数であるのかもしれないが、それだけで成果を判断するような研究社会は研究クオリティの低下にもつながる可能性があり大変危険であると感じる。上記すべての面の業績を評価指標として考慮できるシステムを作るべきである。

また、レター誌ばかりでフルペーパーを書く能力をつけにくいというのも心配であるが、それ以上に論文数やインパクトファクターでなく、論文の中身を評価するのも必要なことだと思う(その他の回答にもあり)。例えば、内容的に質の低い論文(どこの Journal に出すかということではない)10本と質の高い論文3本とを成果として比べたときに、後者が圧倒的に不利になってしまうのは理解しがたい。しかしながら、現在の評価システムにおいて前者の方が次のポストの就職に有利となるとわかっていて、敢えてじっくり時間をかけて質の高い論文を書こうと思う若手研究者が少なくなるのは当然ではないだろうか。2~3年のスケールで成果(ここでは論文のこと)を見た場合に、4~5年、もしくは10年やそれ以上かけて世に出せるような大発見や素晴らしい研究結果の芽を摘んでしまう可能性が大きい。これこそ、学問の発展の危機につながる。

とてもいい意見だと思ったのは、その他の回答の第3位の最後にあった、「雇用を成果主義から切離し、安定雇用の上で成果を問うべき」である。つまり、「雇用される=成果(論文)が多い」の図式で当てはめると、生活できなくなる不安は常につきまとう。雇用の不安がない状態で切磋琢磨しながら成果を出していく精神的環境に置かれてこそ研究者は一番伸びると思う。精神的安定という意味では、スポーツ選手が結婚して、その後成績が良くなることと似ているように感じる。

「研究計画書、評価用資料、成果公表で時間を取られて、本来教育・研究に割くべき時間が減る」という意見も比較的多く、この部分も見逃せない。ある程度、研究・教育にどっぷりつかる時間というのがあれば、1つのことを集中的に考えることができ、その結果、教育であれば自分自身も学ぶべきことがより見えてくることもあるように思う。研究であれば、じっくり考えたことで初めて見えてくる発見もあると思う。教授の方々からは雑用が多いという話を良く聞き、ポスドクの人からは公募の書類書きで時間を取られるという話を良く聞く。これらが上記の意見に対応すると思われる。

Q82: 大型プロジェクトの拡大傾向について(N図10)

「特に重要な研究分野に予算が重点配分されるのは当然と考える」(回答a)や「学際的な研究が可能」(回答b)のようなポジティブな意見があるのと同程度に、「基礎研究がおろそかになる」(回答d)や「本来の研究・教育に時間を取れない」(回答e)といったネガティブな回答もあり、賛否の意見が分かれていることがわかる。つまり、大型プロジェクトはメリットも大きいので必ずしも否定されるべきものではないが、大型プロジェクトによって中・小規模の研究に予算が回らない状況となってしまうのは萌芽的な研究は育たないものと理解できる。ポスドクからの意見がどちらかと言えばやや否定的(回答a, bよりd, fが多い)である傾向は、プロジェクトで雇われていることが多いポスドクも基礎研究をもっと行いたいと本音では考えていることの反映ではないだろうか?例えば、自分のこれまでやってきた中から見つけたような基礎テーマを自ら発展させたいと思ったりしているポスドクも結構いるのではないかと思う。

Q83: 大学や研究所の人事について(N図11)

一番多かったのは、「常勤のポストが少なすぎる」という回答である。これまでの質問にもあったように、ポスドクの数に対して任期なしポストが圧倒的に少ないので、さほど多くもない任期付きポストの争奪戦をしつつ転々としているわけである。2番目に多い回答が「常勤と非常勤の待遇の差」であるが、これは実際のポスドクの観点から具体的に言わせていただくと、例えば、「官舎に住むことができない」ということや「ボーナスがない」などがあると思う。研究所によっては、非常職は日給制となっており給与が月によ

って変わってしまうのに対し、常勤は月給制で日数に関係なく月々の給与が安定しているなども含まれるのではないだろうか。3番目に多い回答として、「常勤の成果が見合っていない」、「任期が短すぎる」、「助手・助教のポスト削減があまりに大きい」がある。ただでさえ常勤ポストが少ないのに、若手が一番応募しやすい助手・助教ポストが削減されたことで、若手研究者の行き場が更に減少している。また、現状ではプロジェクトの期間が最大でも5年であることが多いため、ポスドクの任期は最大でも5年、多くのケースでは2～3年であり、頻繁に次の就職について考えなければならなくなる。しかも、大抵の人は、契約最終年は次の就職探して研究に専念できない状況にある。その一方で、一部の常勤研究者が十分な成果をあげていないのにも拘らず研究職を続けていけるという現実もある。こうした不公平さを思わずねたんでしまうような精神的悪影響が一部のポスドク研究員に生まれているのではないかと懸念される。つまり、常勤ポストが余りに少ないばかりに、一部の有期雇用研究者に本来生まれないはずのねたみや怒りといった感情が芽生え、非常に良くない精神状態を生み出している。

若手研究者層から回答fとして多く挙げられているように、「採用時の年齢制限」は全くもって廃止すべきである。学位取得の年齢も人に依って様々である。年齢制限がある場合、遅くとも意欲を持って学位を取った人はいったいどうしたらいいのだろうか？そんな人を路頭に迷わすことだけは避けるべきである。学位を取るのが遅い人が損をするだけのこうしたシステムは何もいい影響を生み出さない。

また、回答gにあるように、表面上は公募にも拘らず、実は既に採用者が決まっただけで、その公募のために応募者が準備した資料等が全くもって意味がなかったという話しをよく聞く。その時の若手研究者の気持ちとしては、「その書類の準備に使った時間を研究に充てれば良かった」ときつと悔しい思いであるに違いない。公募書類の準備には時間も結構かかるので、その時間をすべて無駄にされることほど腹立たしいものはない。

その他の意見で、「論文以外の日常業務の評価が低すぎる」というのは尤もだと思う。先ほども書いたように論文以外の部分をきちんと評価するシステムが必要である。

また、「任期制では女性が出産できない」という問題を挙げている人がいたが、これも、その通りだと思う。出産前後・研究ができないのは当たり前であるが、産休中に所謂「成果＝論文」がないと、産後に研究職に復帰したくても、成果が足りないと判断されて公募に通れない。そう考えると出産も敬遠してしまう女性がいてもおかしくはない。女性の問題として大変重要である。この問題は女性研究者の今後を考える上で非常に大事な問題であり、事態や制度の改善が望まれる。

Q83の回答人数の内訳で、ポスドク研究員についてみると、常勤ポストが少ないことへの明らかな不満と常勤職と自分達を比べてしまう悪い影響が見られる。仮にポスドク研究員の更新回数に制限がなかったり、ポスト継続性の保証があつたりすれば、一部常勤職の成果の低さに不満を爆発させるような意見は出なかったか、もしくはもっと少数であつたと思われる。しかも、成果を出せない常勤職の方がポスドク研究員よりも待遇が良いという事実が、常勤職に対するねたみや憎悪の念の増長を促すものと思う。このような本来生み出されるべきではない感情を増長させるような状況は作るべきではない。

Q84：他の世代と自分の世代の比較(N図12)

この結果も非常にクリアな差が「准教授・教授」と「ポスドク研究員」間に見られる。任期なしの「准教授・教授」や「研究所上級職」は、自分達の世代は他の世代より恵まれていると感じている人々が多いのに対し、ポスドクは自分達こそが恵まれていないと考えている。

これまでの回答は、結局のところ、多くのポストドク(任期付き研究員)が、「落ち着いてじっくり研究できる環境がなく、研究する以前に生活をも脅かす不安が常に付きまとう」という状況に置かれていることを示している。これは今の派遣労働者問題と基本的に同じ構図ではないだろうか？ 生活の基盤があってこそ仕事の質が保てるのである。精神的に不安定な状態が定常的に続くことで、本当の意味で病んでしまう研究者を生み出さないための改善策をできるだけ早急に講じることが必要と感じている。

2. 自由回答項目(Q79・Q80)に寄せられた重要な意見のピックアップとまとめ

以下にQ79とQ80における代表的な意見をまとめる。中村ら(2009)のレポートでは大まかなまとめとして書かれているが、アンケート結果を公表して欲しいという意見が多いため、発言者が特定されないように配慮しつつ、寄せられた生の声にできるだけ近い言葉で簡素にまとめた。少数意見も含めて、ここに報告させていただこうと思う。どれも貴重な意見で重要であるが、多数の意見でより迅速に議論すべきと感じたものや少数でも特に重要と思った意見を個人的にピックアップし下線を引いておいたので参考にして欲しい。ただし、下線を引かなかった意見も貴重な意見ばかりであるので、よく読んでいただきたい。このデータは是非、データベースとして活用していただきたい。

質問 79 について

実態・現状の公開希望(N 図 13・分類項目 a)

- ポストドクの現状(人数・生活状況・進路状況)の認知・把握と大学院進学者への現状告知
- ポストドク研究員の待遇・経済的状況・意識・の実態把握及びキャリアの追跡調査
- 気象系ポスト数の認知とその候補者数の認知
- 就職先統計情報
- ポストドク問題の世間への認知と公表(学会では「天気」など)
- 他国(ヨーロッパやアメリカ等)と日本の現状比較
- 世代間待遇格差の実態
- 気象・海洋系分野のニーズの認知
- 不当な研究者選抜の実態調査, 出身大学採用者の現状認知
- ポストドクの給与水準・福利厚生上の利益・不利益の認知
- 定員削減の定量的データの公開
- 大学院重点化の成功の可否の客観データの公開
- 博士号取得者と学部・修士卒の就職状況及び年収等の比較データ
- 年齢・ポスト別の組織ごとの実質給与のデータ公開
- 常勤職につけずに研究職を去った人達の意見の集約
- 継続的雇用についての情報

現状の分析・批判・悲観(N 図 13・分類項目 b)

- ポストドク(研究職)になることへの不安の多さ、「高学歴ワーキングプア」増大の懸念
- ドクター取得条件のばらつき
- 若手研究者が将来への見通しをつけられない現状と将来を担う研究者の減少の懸念

- 業績評価の一律化の問題(成果に時間がかかる分野とすぐ出る分野を一緒にする問題)
- ポストク任期のあまりの短さ
- 助教ポストの削減問題
- 「ポストク問題」解決の困難さ(安定職を増やすか、全員任期付き等、かなり難しい)
- ポストクへの日常的負担増加、及び「ポストク使い捨て」問題
- 継続的な公募への応募とそれに伴う研究テーマの大幅な変更
- 短期成果が見込める研究で論文の大量生産、いい研究(ブレイクスルー等)が廃れることへの懸念(「論文数=成果」の業績評価問題)
- 若手研究者が精神的に病んでしまうことへの懸念
- 無意味な公募年齢制限への不満
- ポスト減少が気象系分野のニーズ減少へ繋がることへの不安
- 気象学会の取り組みの遅さへの不満
- パーマメント世代が現状の問題点を理解していないことへの不満
- パーマメントポストの成果のなさへの不満、再評価希望
- 優秀な人材の国外流出による分野の縮小と研究費の縮小という負のスパイラルへの懸念
- 博士課程へ進む学生が減っていることが気象分野の将来へ与える影響の不安
- 実力があるポストクは理想的キャリアパスを進んでいること
- 標準的実力の研究者がきちんと評価されるための明瞭な審査基準・人材希望条件等の公表

方針・政策の提言(N 図 13・分類項目 c)

- 研究環境整備・ポスト数増加へ向けた国家規模の取組み
- 将来設計サポート、雇用枠拡大希望、ポストク地位向上(保険・福利厚生含む)
- 政府レベルへの働きかけ強化
- 気象庁等気象関係分野で技術者として採用する選択肢の拡充
- 博士課程進学者数の制限、もしくは学位取得基準を上げる(雇用需要とのバランス含む)
- 非営利的な気象海洋業務への国のバックアップの必要性
- 今後 10~20 年の雇用枠の中期展望
- 科学政策についての政府から離れた中立的な視点での議論
- 気象分野の重要性の発信
- 学会の指針の明示により将来設計の見直し改善へ
- 予算配分に関わる官僚ポストに理系博士号取得者を
- 常勤職の新規採用休止の代わりに年齢制限の廃止(ワークシェアリング等も導入希望)
- 多くの 30 代半ば研究者の行き倒れと日本の科学界への将来への暗い影
- 海外のポストへの可能性の拡大
- 専門外分野での研究活動を志す者へのサポートシステムの構築
- 現在の対策の方法・方針の作成経緯を研究者側へ説明
- 人材を適材適所で活かせるシステム(出世コース以外での研究継続の道の開拓:請け負い研究に向く研究者にはそういう研究を任せられる研究システム)

- 定年延長の凍結
- 今後のポスドク・常勤職の数の増減公表, それに見合った対策
- 大型プロジェクトの各研究者の貢献エフォートの明示化(具体的研究の研究者と社会的貢献に関わる研究者の戦略的配置)
- 学界上層部の見通しの甘さ, 政府レベルへの働きかけの強化希望
- 就職させる力のある教員のリストアップ
- 今後, 必要のない分野の大学・研究所設立廃止
- 社会人と研究者の乖離をなくすための方策
- 政府・学界有識者の「ポスドク1万人計画」に対する見解の公表
- ポスドク1万人計画は, 学術・科学技術に依存する当時の日本の現状を反映
- 「ポスドク労働組合」のような組織の設立と社会へのアピール

就職情報・公募情報(N 図 13・分類項目 d)

- 学部時代に, 進学もしくは就職の判断について多くの情報を提供
- 博士号取得者・ポスドクの進路調査, 及び研究者(もしくは教員コース)以外の多様なキャリアパスについての情報提供と開拓, 経験者の体験談提供
- 分野・国を越えた研究者採用情報提供と雇用推進(民間含む)
- 研究者の人生ロードマップ作成のため議論の機会の増加
- 研究者になる多様な道(論文博士の道等)
- 研究者本人・周囲の人々による研究者素質の早期見極め
- 学会等による, 定期的な就職関連イベントの開催
- 地域社会の気象のニーズに応えるための気象分野の研究者のより密接な関わり
- ポスドクが抱える時間とお金の浪費問題(引越貧乏・次のポスト確保への頻繁な公募書類作成等)
- 透明な公募情報, 公募の客観的評価基準の提示

ポスト増要求(N 図 13・分類項目 e)

- ポスト増加希望(常勤職への希望の多さ, 任期付きなら保障等の向上希望)
- 院生数減少の希望
- ポスト数増加及び, 仕事内容と将来のポスト数の見通し.

Q80 について

研究環境・実態の交流・発信(N 図 14・分類項目 a)

- 問題の現状認知・報告・迅速な公表と政府への意見を上げる
- ポスト数増加
- 活発な意見交換
- 日本の気象学の将来を担う若手研究者が辞めていくのも時間の問題
- パーマネント職の流動性の低さ
- 公募に公平さが欠けている場合があること

- 長期的視点に立った研究ができない。ポスドクは力をつける時期(即戦力ではない)。人材育成できない。ポスドクは立場も弱い。
- 気象庁縮小反対
- 常勤職の再評価・常勤職の危機感のなさ・常勤職への不満
- このアンケートで実態把握
- ポストが増えないということは、気象分野のポスドクが過剰を示唆
- 業績評価での「論文数圧力」の緩和・改善
- 大学院生の意識改善，進学の前に現状認知
- 責任ある指導層の育成と指導層の意識改革
- 研究者適性を判断せずに指導者が学生を博士課程に進学させても，結局は本人の責任
- 若手研究者に雑用を丸投げする実態の改善(学生指導・計算機管理等)
- 任期が切れた若手研究員の支援策(使い捨て禁止！)。将来の人材育成をきちんと考えた条件で雇用希望。
- ポスドク研究員の追跡調査
- 「ポスドク1万人計画」の見通しの甘さの再認知とそれを踏まえた提言
- プロジェクト研究による短期成果主義の加速問題
- 組織の名前だけ変わり，中身が変わっていない研究組織がある問題
- 国策に問題解決を迅速に反映
- 学会の希薄化への危惧
- ポスドク制度がなかった昔よりは経済面では恵まれていること
- 長期的基礎研究が減ることでの研究の質低下の懸念

研究方針・政策の発信(N 図 14・分類項目 b)

- 国家の補助，ポスドク問題を作った政府が最後まで責任を持つべき。
- とにかくポスト増加を！(常勤職増加への希望多数)
- 民間企業・気象庁・環境省等での気象分野研究者の採用増加
- 現状・要望を政府レベル・関係機関へ上げて改善要求
- 研究者過剰
- 若手研究者減少(流出)で研究レベル低下を招かないような対策を！
- 人材確保のためであれば，大型プロジェクト・競争的資金の削減をしても良い。
- ポスドクと常勤職との間のポストの増加提案
- ポスドク・博士課程学生への金融・財政相談窓口設置
- 分野・領域の曖昧さ，日本の気象分野の方向性(長期的な展望含む)
- 気象分野の他分野(例えば情報系)への有効性
- 早急な対策(意見収集レベルで終わらせないこと！)
- 大型プロジェクトの再考，基礎研究の維持
- 政府の長期科学ビジョンへの曖昧さの改善(長期財政負担の敬遠)
- ポスドクの地位向上及び待遇改善

- 研究に専念できる環境の整備：任期・更新回数制限の改善（継続雇用として、定年までの保障へ）、公募の年齢制限の廃止。
- 大学院博士課程進学者を減らす
- 長期的に予算制約が変わらないとして、ポストをどうやって確保していくのか？
- 常勤職の再評価、場合によっては任期付に。
- ポスドクを「独立研究者」と国が認める新しい研究システムの提案
- 学振特別研究員の採用条件が厳し過ぎて採用数が増えない
- 他の機関と連携して PD 問題対応策を議論
- 気象業界を国内外・民間を含め業界全体を盛り上げるシステム作り
- 「ポスドク組合」の設立
- 国が無理なら学会で基礎研究を維持できる研究費を確保
- 「ポスドク問題」を一般的国政問題として社会に認知
- 予算の公正かつ有効利用の方法模索（ソフトマネー・ハードマネーの観点等を導入）

成果の交流・発信（N 図 14・分類項目 c）

- 基礎研究の振興
- 積極的な活動
- 各省庁の現業部門との橋渡し
- 気象系分野の関連分野の発展から就職間口の拡大
- 研究成果は、論文数・引用数ではなく、知見の貢献で評価すべき
- 気象学会として研究者レベルアップへ取り組む
- 博士号取得後数年以内のポスドクへの学会賞の設置

気象学の重要性の発信（N 図 14・分類項目 d）

- 科学振興・気象研究等の国民への理解、社会への積極的な関わりと成果の還元
- 気象学の基礎研究とその応用研究（災害・温暖化研究等）の関係の明示と世間への認知
- 分野を越えた研究のより一層のサポート
- 若手が気象分野以外への就職にも有利になるシステムを
- 他学会との関わり・連携強化
- 民間企業への博士号取得者の有効性の提示と採用希望

就職・企業情報（N 図 14・分類項目 e）

- キャリアサポート活発化・経済支援・就職斡旋・気象系研究者が自分を活かせる職の模索
- 学会を通じての企業・社会団体とのコネクション強化。若手研究者のこれらとの接触機会の増加。就職枠の拡大へ。
- ポスト確保への資金獲得
- 産休後復帰のための支援
- 学会としての「ポスドク問題」への対応が見えてこない

- 教員・院生・PD の意識改革のための活動の推進

3. 本アンケート以外で若手研究者から出されている意見の例

今回のアンケートとは別に個人的に気象学会会員のポスドク研究者から耳にしたのは、「厳しい状況にいるポスドクが、他のポスドクの有利になることを嫌い、互いに牽制し合うという弊害がある」という意見である。極端な例として、あるポスドクに別のポスドクが投稿した論文の査読依頼が来た場合に無用な難癖をつけて審査を引き延ばすなど、ポスドク同士の不毛な足の引っ張り合いが存在するらしい。また、熱意を持った若手研究者がその力を発揮できずに持て余しているとも聞いている。こうした憂慮すべき事態が継続すると、若手研究者が研究意欲を失いかねないことが懸念される。

参考文献

- 中村 尚, 遊馬芳雄, 寺尾 徹, 中島映至, 2009: 日本気象学会・日本学術会議IAMAS 小委員会共同実施「若手研究者アンケート」の第1次集計結果の分析, 天気, 56, 投稿中.
- 安成哲平, 2009:「若手研究者アンケート」の第1次集計結果の分析と提言 ―若手研究者の視点から―, 天気, 56, 投稿中.